2014 · 第4辑

日语教育与日本学

■日语教育研究 ■日本语学研究 ■日本文学与比较文学研究
■日本文化研究 ■翻译与中日语言对比研究

执行主编◎徐 曙

華東理工大學出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS

2014 · 第4辑

日语教育与日本学

華東理工大學出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS
·上海·

图书在版编目(CIP)数据

日语教育与日本学(第4辑)/徐曙主编. —上海：华东理工大学出版社，2014.4

ISBN 978-7-5628-3814-2

Ⅰ.①日… Ⅱ.①徐… Ⅲ.①日语-语言教学-文集②日本-研究-文集 Ⅳ.①H369-53②K313.07-53

中国版本图书馆CIP数据核字(2014)第036296号

日语教育与日本学(第4辑)

执行主编 / 徐　曙
责任编辑 / 嵇　蕾
责任校对 / 金慧娟
封面设计 / 戚亮轩
出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司
地　址：上海市梅陇路130号，200237
电　话：(021)64250306(营销部)
(021)64252001(编辑室)
传　真：(021)64252707
网　址：press.ecust.edu.cn
印　　刷 / 常熟华顺印刷有限公司
开　　本 / 787mm×1092mm　1/16
印　　张 / 12.25
字　　数 / 295千字
版　　次 / 2014年4月第1版
印　　次 / 2014年4月第1次
书　　号 / ISBN 978-7-5628-3814-2
定　　价 / 58.00元

联系我们：电子邮箱 press_wy@ecust.edu.cn
官方微博 e.weibo.com/ecustpress
淘 宝 网 http://shop61951206.taobao.com

日语教育与日本学

2014·第4辑

日语教学研究会上海分会　主办

编 委 会 主 任：徐一平
编委会副主任：刘晓芳　张　辉
执 行 主 编：徐　曙

编委会顾问
（按姓氏汉语拼音为序）
陈俊森　高　宁　侯仁锋　揭　侠　刘金才
陆留弟　皮细庚　宿久高　谭晶华　王铁桥
王　勇　徐一平　于荣胜　赵　刚　赵华敏

编委会成员
（按姓氏汉语拼音为序）
蔡敦达　陈多友　冷丽敏　李　强
刘晓芳　刘雨珍　毛文伟　潘　钧
庞志春　钱晓波　宋协毅　孙成岗
吴　川　徐　冰　许慈惠　徐　曙

目　　录

·日语教育研究·

相互理解のための異文化理解能力の養成
——JFスタンダード準拠教材『まるごと 日本のことばと文化入門 A1』
（試用版）を使って …… 鈴木今日子　松浦とも子　柳坪幸佳(1)
異文化理解能力育成を目指した教材の開発と中等教育日本語教師の意識
——『艾琳学日语　エリンが挑戦！にほんごできます。』
…… 柳坪幸佳　松浦とも子　鈴木今日子(7)
试析完形填空试题的设计与编制 …… 侯仁锋(13)
会話授業における教具の有効性
——教具·教材の有効性と学生の意識との関係 …… 富岡一十見(26)
礼貌原则与日语敬语 …… 朱世波(33)

·日本语学研究·

基于联想实验的「上」和“上”的意象图式研究 …… 徐莲(39)
空间纬度词“高/低”的日汉对比研究 …… 李倩　张兴(50)
“字侨”的“东迁”与“回归” …… 庞志春(65)
日语的“取消请求”言语行为研究
——基于对日语母语者和中国人日语学习者的一项实证调查 …… 孙杨(71)
关于テクレル句特殊性的考察
——以篇章中的分布特征为依据 …… 孙斐(86)
日语反义二字复合词的词法特征考察 …… 芦茜(98)
日语被动构式的句法假说
——以边缘化现象为中心 …… 王秋霞(108)
如何界定“变化” …… 刘剑(117)
格助词「から」的认知语义功能
——与汉语介词“从”对比的角度 …… 时晓阳(125)
汉日句子接续与翻译 …… 朱芬(131)

·日本文学与比较文学研究·

被束缚的自我
——从葛西善藏的《悲哀的父亲》到《醉狂者的独白》 …… 周砚舒(138)
绝海中津研究现状述评 …… 车才良(148)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

·日本文化研究·

探讨日本明治维新的成功之道
——黄遵宪《日本杂事诗》所塑造的日本形象 …… 王立群(153)

·翻译与中日语言对比研究·

浅析影响翻译的语内、语外因素与翻译标准
——《罗生门》中译本的比较分析 …… 王柏静(162)
定中结构短语型情感隐喻的汉日对比 …… 李爱华(175)
从上田敏翻译的《心》看转译的功与罪 …… 梁艳(181)

本辑专刊系上海对外经贸大学“085工程”项目成果(项目编号:Z085WGYYX13070)。

相互理解のための異文化理解能力の養成
——JFスタンダード準拠教材『まるごと　日本のことばと文化入門 A1』(試用版)を使って

国際交流基金北京日本文化センター　鈴木今日子　松浦とも子　柳坪幸佳

1. JFスタンダードにおける異文化理解能力

価値観が多様化し、人と人との接触や交流が拡大していく現代社会において、言葉によるコミュニケーションの重要性がますます高まっている。国際交流基金では、「相互理解のための日本語」という理念のもと、「JF 日本語教育スタンダード2010」(以下、JFスタンダード)を開発し、2010年に公開した。JFスタンダードは、相互理解のために必要な能力として「課題遂行能力」と「異文化理解能力」を挙げている。JFスタンダードの「課題遂行能力」とは、発信者と受信者が日本語を使ってある領域や場で特定の課題を共同遂行する際に必要な能力のことである。「異文化理解能力」とは、学習者が日本語を学んだり、使ったりすることで、母語とは異なる言語や文化に触れ、複合的な視野を広げ、自文化を相対化して新しい視点を持つために必要な能力であるとしている。

JF スタンダードは2001年に欧州評議会が(Council of Europe)発表したCEFR(Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment)を参考にして作られている。そして、CEFRはByram(1997)が提起した「Intercultural Communicative Competence」モデルを取り入れている。Byramのモデルでは、異文化理解能力とは、「態度」「知識」「技能」の3つの要素が密接に関連し合ったものであると主張している。「態度」とは、「好奇心とオープン姿勢、多文化についての間違った見方や自文化についての考え方を保留することの出来る態度」であるとし、「知識」とは、「自分と相手の国における社会的グループ、その社会的グループの所産物と生活習慣・慣習」のみならず、「社会的・個人的なインターアクションのプロセス」についての知識であるとしている。そして、「技能」とは、「解釈し、関連付けることの出来る技能」と「発見しインターアクション出来る技能」があるとしている。そして、JFスタンダードの「異文化理解能力」もこのByramのモデルを参考にしている。

2.『まるごと日本のことばと文化』の異文化理解のためのしかけ

国際交流基金では、JFスタンダードに準拠した教材の開発にも取り組み、2013年5月現在、A1(入門)～A2・B1(初中級)レベルまで、『まるごと　日本のことばと文化』(試用

版)(以下、『まるごと』)が作成されている。この『まるごと』は海外の一般成人を対象に作成されており、実用目的だけでなく、日本語を気軽に勉強してみたい、日本について興味があるから学びたい、外国語学習を楽しみたい、という学習者を幅広く想定している。

先に述べたようにJFスタンダードは、相互理解のためには、日本語力だけでなく、異文化理解能力も必要であるとしている。よって、JFスタンダード準拠教材である『まるごと』は、言語と文化の両方を学べる教材として作成された。文化面においては、学習者が日本文化を理解し、さらに日本文化を通して学習者自身の文化をふりかえり、異文化理解能力を養うことを目指している。『まるごと』では、異文化理解能力を持った人を以下のようにイメージしている。

・さまざまな文化に触れることで視野を広げ他者の文化を理解し尊重する。
・日本語を使って、相互に柔軟に調整しあう。
・人間関係構築のためにコミュニケーションできる。

そして、上記の異文化理解能力を養成するために『まるごと』では、次のようなさまざまなしかけを施し、異文化理解を促している。

・A4版でフルカラー、写真やイラストが多用されている。これによって日本文化を伝えたり、学習を楽しく効果的に行ったりすることができる。
・本編の写真(物、人)会話の内容や場面・設定状況、多様な文化背景・世代の登場人物にも異文化理解のためのヒントが盛り込まれている。
・異文化理解のために「社会文化」のページを特に設けている。トピックに関連した写真を掲載。自国文化や自分自身と比較しながら、話し合う(母語・媒介語使用を想定)。また、異文化理解を深めるような質問も配している。

3. 中国人教師が考える「異文化理解」の捉え方

では、教師はどのように「異文化理解」を捉えて『まるごと』を使用するのだろうか。北京日本文化センターでは2013年5月～6月にかけて、『まるごとA1入門編　活動編・理解編』(試用版)を使用し、一般成人を対象に短期集中講座(3時間30分/日×20日)を実施した。その際、講座を担当した中国人教師3人の①「社会文化」の教案(授業想定時間10分程度)、②フォローアップ・インタビュー(各教師20～30分)、③講座終了後の感想の3つを分析し、教師の「異文化理解」の捉え方を調査した。なお、『まるごと』は上述のように、教材全体に異文化理解のしかけが施されているが、「社会文化」は異文化理解を明示的に提示しているため、今回特に「社会文化」部分の教案を取り上げ、調査することにした。教案を書いた「社会文化」のテーマは、「名前」「家族」「ファーストフードの店」「日本の家」であり、「社会文化」の各ページにはテーマに関連した写真等が掲載されている。

表1に3人の教師の教案、フォローアップ・インタビュー、講座終了後の感想の一部をまとめる。教師Aは4つのトピックの教案全てに「～を紹介する」という記述が見られ、異文化理解とは、学習者が知識を得ることだと捉えている。フォローアップ・インタビューからは、教師Aは、「文化」とは「特徴のある文化」「伝統文化」だと考えていることもうかがえる。また、教師Aは、日本の文化を画一的に捉えており、日本の家の特徴については

話せるが、中国の家は地方によって違うため、比較できないと話していた。

教師Bは、各教案に「自国と比べる」「中国との違いを意識する」という記述が見られた。これは、事前に『まるごと』の「教材の概要」を読んだため、概要に記載されていた「比較」を意識して教案を作成したとのことであった。しかし、教師Bは自国と比較した結果、自国のマイナス面ばかりが目立ってしまったと悩んでいた。また、日本文化について話す際、個人的な主観がどうしても入ってしまうが、それを学習者に伝えることがよいのか、そしてそれが「正しい」文化なのかどうかわからないと話していた。

教師Cは、各トピックの社会背景に焦点をあてようとしている。教師Cはこの「社会文化」のページは日本人の一般的な生活を理解するためにあると思ったと話している。また、教師Cは異文化を理解するには、対話、ディスカッションが重要であり、そのためには、背景知識が必要であるとも述べている。

表1　中国人教師の捉えた「異文化理解」(一部抜粋)

	教師A	教師B	教師C
教案	・社会文化の部分の呼び方を生徒たち想像させてから、講師が紹介してあげる ・日本の「家族」の呼び方を紹介する	・自国と比べる ・中国との違いを意識する	・日本人の名前の起源(苗字帯刀) ・日本社会における「うち」と「そと」 ・ファーストフードはどうして不可欠なのか?
フォローアップ・インタビュー	・伝統文化を知れば、自分の国と違うことに気づく ・特徴があるところを出したほうがいい ・「いろいろなファーストフード」のページには文化の要素がない ・みんなが知っているのはアニメばかりだ ・中国の家は地方によって違う。日本と比較できない	・共通するところは特に説明しなくてもいい ・共通点を見つけると安心する ・日本文化の輝いているところを紹介したい ・自らの体験を伝えたい ・中国は何でもダメな方にいってしまった ・日本文化の全体像がないので、個人的なものが入ってしまう	・日本の一般人の生活を理解するために「社会文化」があると思った ・対話することで異文化理解につながる ・対話するためには背景知識が必要 ・ある程度関心がなければ異文化理解にはつながらない
講座終了後の感想	・「日本の町」はやりにくかった。写真を確認していったが、学生はあまり興味がないような感じだった。たぶん北京と同じところがあるかもしれない	・日本は握手よりお辞儀が一般的だと意識できた ・日本の「丁目」は外国人には独特のものだ。これをきっかけに「丁目」の意味に注意を向けた ・自分と他人の家族の言い方が違うことが意識できた ・やりにくいところはなかった	やりにくいテーマ ・個別性のないテーマ(どの国にも存在する) ・グローバル化のテーマ。ハンバーガーの店など、世界どの国もほぼ同じ感じで、学習者は文化理解というよりむしろ言葉の勉強だと捉えている。学習者は異文化とは思わない

以上、各教師の「異文化理解」の捉え方は異なってはいるが、自文化と比較するという点は共通している。教師Aと教師Bは、「違い」を重視しているのに対し、教師Cは「社会背景・背景知識」を重視し、さらに対話が重要だと述べているが、実際の授業では、「社会背景・背景知識」の紹介にとどまっており、学習者がディスカッションするまでには至ってはいない。また、教師Cも「個別性」のないものはやりくにいと述べている。

以上、教師は3人とも、自文化との違いを知ることが「異文化理解」だと捉えていることがわかる。一方、自文化との違いがない事象については、扱いに困っている様子もうかがえる。教材の「社会文化」の進め方には、「あなたの国と比較して違うことや同じこと見つけましょう。感じたことや考えたことを母語で話しましょう。」と記載されているが、

「同じこと見つける」ことが、異文化理解にどうつながるのか理解できていないようである。また、3人の教師の「社会文化」の授業では、時間の制約もあるが、学習者からの意見を取り上げたり、学習者同士が話し合うことによって、異文化理解を促そうという教師の意識は見られなかった。

4.『まるごと』を通して学習者が感じた「文化」

次に、学習者が『まるごと』を通して、文化をどう受け取ったのかを観察する。講座開始2週間後と、講座終了時(講座開始から4週間後)の2回、学習者にアンケートとインタビュー(1人5分程度)を行い、『まるごと』の授業を通して、文化について印象に残ったことを調査した。以下、学習者のコメントを抜粋してまとめる。

『まるごと』使用した学習者の文化に対するコメント(講座受講者12名)
(インタビュー及び、アンケートより一部抜粋　※原文は中国語)

①印象に残ったこと

日本の家、礼儀(マナー)、家族、歌舞伎、茶道、柔道、菓子(日本各地の名菓)、修学旅行、相撲、着物、伝統文化、教師の体験談。

②気づき・発見

・教材の場面設定から、日本人は晩ご飯や寝る時間が遅いと知って驚いた。
・「訪問」の場面を勉強した時、日本はマナーが多いと感じた。
・これまでドラマなどを見て日本の文化は知っていた。しかし、ドラマに出てきた祭りなどが、日本では重要な祭りだとあらためて知った。

③自文化への振り返り

・日本はアジアの伝統文化を大切にしながら、外国の文化を積極的に取り入れる(中国より大切にしている気がする)。
・日中両国が互いに学ぶべきことはたくさんあると思う。
・飲食は中国人と通じるところがある。
・中国文化と深くつながっているところから親近感がわいてきた。

④関心·態度

·食べ物、家、教師の体験談、教師の話を聞いていろいろ考えさせられた。

·日本に旅行に行きたい。

·日本文化についてもっと知りたい。

·礼儀に関する決まりや習慣が多い。自分の人に接する態度が少し変わった。

⑤印象に残っていること特になし

·日本文化は前から知っている。特におもしろいところはない。

·文化と日本語を学べる教材だと聞いて、文化を深く理解できるようにいろいろ入っていると思っていたが、実際文化についてはあまり多くなかった。

印象に残った文化として、茶道、華道のような伝統文化のほか、日本の家、礼儀(マナー)などを挙げる学習者が多かった。自文化との「違い」が、日本の文化として印象に残ったようである。

コメントの多くは「茶道」「礼儀」など、単語を簡単に挙げるだけにとどまっていたが、「違い」から自文化を振り返ったというコメントのほか、「違い」だけでなく、自文化との「つながり」に気づいたというコメントもいくつか見られ、学習者が日本の文化を自文化と相対的に関連づけている様子がうかがえる。さらに、日本人の他人への接し方を知り、自分の人への接し方も変化したというコメントもあり、内的な思考だけでなく、行動も変化した学習者もいた。

また、教師の体験談が印象に残っているとコメントした学習者も多かった。個人の体験談は、現実的で説得力があるのかもしれない。体験談は、個人の主観を一方的に押し付けるのではないかと危惧していた教師もいたが、学習者には体験談が印象深かったようである。教師の体験談が文化を考えるきっかけにもなったコメントしている学習者もいる。

一方で、特に文化に関して特に印象に残ったことはないとコメントした学習者も数名いた。この学習者たちは、すでに日本文化に対する知識をある程度持っており、特に目新しいところはなかったと述べている。

以上、学習者のコメントから、学習者は『まるごと』の授業を通して、さまざまな文化を感じとっていたことがわかった。日本文化の「知識」のみに言及した学習者から、自文化への振り返り、自身の行動の変化に言及した学習者まで、学習者の異文化理解の程度には個人差はあるが、『まるごと』の「学習者が日本文化を理解し、さらに日本文化を通して学習者自身の文化をふりかえり、異文化理解能力を養成する」という狙いは達成されていると言えるであろう。

5. まとめと今後の課題

以上、JFスタンダード準拠教材『まるごと』を使用して学習者の「異文化理解能力」がどう養成されるのか、教師の意識と学習者が実際に感じた文化を調査し、分析·考察した。その結果、教師は、自文化との違いを知識として教えることが学習者の異文化理解

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

につながると捉えていることがわかった。一方、学習者は、個人差はあるものの、知識、気づき・発見、相違点を含めた自文化への振り返り、行動の変化等、異文化理解能力が涵養されている様子が観察できた。これは、Byramが「異文化理解能力」の3要素として挙げた「知識」「態度」「技能」が、養成されたと言えるのではないだろうか。

今後、さらに学習者の異文化理解能力を養成するためには、「知識」のほか、「態度」「技能」も教師が意識し、学習者の異文化理解を促していくことが必要であろう。それには、まず『まるごと』を使用する教師が『まるごと』の目指す異文化理解能力とは何かを十分に理解しなければならない。そのうえで、その異文化理解能力を養成する具体的な授業方法を知る必要もある。先述の通り、『まるごと』には、異文化理解のためのさまざまなしかけがあるが、教師がそのしかけを十分に生かしきれていない実態も今回の調査で浮かび上がった。教材には、学習者が自文化との共通点を発見したり、学習者同士が話し合ったりするように促す問いかけがあるが、それが異文化理解にどうつながるのか、教師には十分に理解されておらず、実際の授業ではほとんど行われていなかった。学習者の異文化理解能力を養成するために、『まるごと』のより効果的な授業方法を教師に提示していくことが今後の課題である。

参考文献

[1] 来嶋洋美,柴原智代,八田直美.2012.JF日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発.国際交流基金日本語教育紀要8号:103-117.
[2] 国際交流基金.2009.JF日本語教育スタンダード試行版.
[3] 国際交流基金.2012.JF日本語教育スタンダード2010(第二版).
[4] Council of Europe.吉島茂,大橋理枝(他)訳・編.2004.外国語教育Ⅱ外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠.朝日出版社.

作者信息

鈴木今日子　女　日本国际交流基金北京文化中心　日语教育专家
研究方向:日语教育　E-mail:kyoko_suzuki@jpfbj.cn

松浦とも子　女　日本国际交流基金北京文化中心　日语教育专家
研究方向:日语教育　E-mail: tomoko_matsuura@jpfbj.cn

柳坪幸佳　女　日本国际交流基金北京文化中心　日语教育专家
研究方向:日语教育　E-mail: sachika_yanagatsubo@jpfbj.cn

異文化理解能力育成を目指した教材の開発と中等教育日本語教師の意識
——『艾琳学日语　エリンが挑戦！にほんごできます。』

国際交流基金北京日本文化センター　柳坪幸佳　松浦とも子　鈴木今日子

1. 外国語教育における異文化理解能力の育成

近年、外国語学習と異文化理解能力との関連に大きな関心が寄せられている。中国の日本語教育のシラバスを見ても、大学教育段階の教学大綱及び中等教育段階の課程標準いずれも文化について言及しており、この分野が重視されていることがわかる。

三、文化素养

文化背景知识	·初步了解日本的地理位置、国土、人口、行政区划、气候特征等基本国情 ·初步了解日本中学生的学习和生活、日本人的家居特点、饮食习及发明创造 ·初步了解日本的大众体育活动、主要节假日等
言语行为特征	·初步了解日本人的称呼习俗 ·初步了解日语交际中常用的委婉、含蓄的表达方式 ·初步了解日语交际中问候、告别、请求、感谢以及陈述原因或理由时的得体表达
非言语行为特征	·初步了解日语交际中的肢体语言 ·初步了解日语交际中的礼仪习惯 ·初步了解日本人际交往中的时间观念 ·初步了解日语交际中的距离和声音的适宜程度

四、情感态度

兴趣动机	·有学习日语、了解日本和其他国家的兴趣和愿望，并将其迁移到主动学习日语上来 ·有明确的学习动机，保持积极的学习情绪，乐于参加各项日语实践活动
自信意志	·在日语学习活动中克服胆怯心理，大胆模仿，敢于用日语表达。 ·在日语学习过程中感受乐趣，体验获得成功的喜悦，树立学好日语的信心 ·努力克服日语学习中遇到的困难，磨炼意志
合作精神	·在日语学习的各种活动中积极与他人合作，相互帮助，创造性地共同完成交际性学习任务
祖国意识	·通过日语学习进一步理解祖国的语言文化，增强民族自豪感
国际视野	·通过日语学习开阔视野，关注并理解他人的情感，具有初步的跨文化交际意识和国际意识

図1　義務教育日語課程標準（2011年版）

2011年に改訂された中等教育対象の日語課程標準を見ると、日本語学習の目標として、語言知識・語言技能・学習ストラテジーといった言語や学習に直結した能力以外に、「文化素養」と「情感態度」が挙げられている（図1）。「文化素養」では「文化背景知識、言語行為特徴、非言語行為特徴」の三つの下位項目に分類した上で、それぞれ文化の何を授業で扱うかが記されている。例として、「文化背景知識」として、「日本の位置・国土・人口」「日本の中高生の日常生活」「祝日」などが挙げられている。

また、「情感態度」では、日本語学習によって生徒のどのような能力・態度の育成を目指すかが記されている。そこで挙げられているのは「興趣動機」「自信意志」「合作精神」「祖国意識」「国際視野」の五つである。これらの能力は、異文化理解能力の構成要素として挙げられることもある「興味・好奇心」や「自文化」を連想することもでき、課程標準が目指すものが、言語知識や運用能力のみならず、生徒の異文化理解能力や人間的成長でもあると言うことができよう①。

2.『艾琳学日语』の開発

以上のように、中国の中等教育機関における日本語教育では、文化に触れることやそれによる生徒の人間的成長が目標の一つとして掲げられていることがわかった。このような状況の中で、国際交流基金北京日本文化センター(以下、北京日本文化センター)は2013年に、異文化理解能力育成を目標の一つにしたDVD日本語教材『艾琳学日语　エリンが挑戦！にほんごできます。』(以下、『艾琳学日语』)を出版した。対象は中国で日本語を学ぶ高校生である。

現在既に中国では多くの教材が出版され、中等教育機関で最もよく使われている「日語」シリーズ(人民教育出版社)を見ても、日本語学習を通じて多くの文化素材に触れられる内容となっている。が、『艾琳学日语』では異文化理解能力の育成を更に前面に押し出した。

『艾琳学日语』のもとになったのは、2007年に出版された国際交流基金日本語国際センター『DVDで学ぶ日本語　エリンが挑戦！にほんごできます。』(以下、『エリンが挑戦』)である。この教科書を今回『艾琳学日语』として出版するにあたり、北京日本文化センターでは中国向けに大幅に編集を加えた。

もともと『エリンが挑戦』は、海外の若い学習者の異文化理解能力養成を目指した教材である。素材として取り上げられているのは、世界の高校生が知りたいとされる日本の同年代の若者の日常生活であり、また、DVD映像を見ることで、文化の違いや背景に生徒自ら気づく力を養成することを目指す教材となっている②。

今回中国で出版された『艾琳学日语』では異文化理解能力育成の気づきが更に促されるよう、「文化」というページを新しく作成した。同ページではDVDを見ての気づきや疑問に関する設問や活動を課ごとに用意し、それによって「事象の背景を考える力」「自文化(自己への理解)」「多様性に気づく力」など、学習者に特に伸ばしてもらいたい異文化理解能力を意識的に喚起することを狙った。

以下、その例をいくつか紹介する。

---

① 例えば、山岸みどりは「異文化能力とその育成」(1995)の中で、異文化対処力の要素を「カルチュラル・アウェアネス」「自己調整能力」「状況調整能力」にカテゴリー化し、それぞれの下に更に「自文化(自己への理解)」「非自民族中心主義」「外国文化への興味」「感受性」「寛容性」「柔軟性」「オープンネス」「コミュニケーション」「対人関係」「マネージメント」「判断力」「知的能力」の12を位置づけている。

② 簗島(2010)

例①　第16課「叙述理由——兼职」

ここで扱ったのは「背景を考える力」である。第16課では、「見てみよう一高中生的兼职」の映像の中に、3人の高校生のアルバイトの様子が出ている。設問では、見る前に「日本の高校生にはアルバイトをしている人がいるが、どうしてアルバイトをすると思うか」という質問を設けている。クラスで話し合ったり自分で考えたりすることによって、DVDをただ面白く見るのではなく、ある事象の背景を考えていく態度を養うことを目指している。

例②　第15課「表示逆说的说法——课程」

第15課では、「自文化(自己への理解)」を促すことを目指している。ここのテーマは「表示逆说的说法——课程」であり、日本の学校生活を扱った数編のDVDの中では、数学・美術・国語・英語・家庭科などの授業風景を見ることができる。「文化」コーナーではまず日本の時間割例を紹介しているが、日本の学校生活について知るだけではなく、「あなたの学校と日本の学校の時間割を比較してください。どんな点が同じでどんな点が違っていますか」という質問を行っている。それによって自分の文化や日常生活を改めてふりかえることを目指している。また、それぞれの文化の違いばかりを強調するのではなく、同じ点や似た点に気づかせることも意識している。

1. 看DVD的"基本スキット""応用スキット"，比较艾琳家的晚饭和藤冈咲家的晚饭。
（可以使用汉语）

	艾琳家(基本スキット)	藤冈咲家(応用スキット)
谁做的晚饭		
晚饭是什么		
艾琳和藤冈咲都帮忙做了什么		
和谁一起吃晚饭		

図2　第3課

例③　第3課「指着物品回答——在家里」

日本文化の見方を一面的にとらえず、「多様性に気づく視点」を養うために、第3課では複数の家庭の夕食風景を紹介している。一方の家庭では母親が料理を作り主人公がそれを手伝っているが、他方の家庭では母親が出来合いの料理を買って遅く帰り、電子レンジでそれを温めて家族で食べるという内容である。そこで、その違いがより明確に対比されるよう、「文化」コーナーでは、それぞれの家庭において「誰が料理を作っていますか」「夕食は何ですか」「エリン(人名)と咲(人名)はどんなお手伝いをしましたか」「誰と一緒に夕食を食べましたか」といった質問をし、それぞれを対比させる表を作っている(図2)。この作業を通じて、事象に対する固定的な見方の回避を意図的に目指したものである。

以上、いくつかの課を例として紹介した。多くは教室内で議論を行ったり自分自身でふりかえったりする形式をとっている。これら活動は必ずしも日本語で行うことは目指してはいない。多くは中国語で行うことを前提としており、設問にも「也可使用汉语」(中国語を使ってもよい)という注意書きをつけている。日本語入門レベルの段階から意見交換や思考を深める経験を積み重ね、それによって生徒の人間的成長が促されることを、これによって期待している。

3. 生徒の気づき

同教材は2013年4月の出版に先立ち、2012年9月からの一年間、原稿をもとに北京の中等教育機関2校において試用を実施した。そして、試用開始半年目の2013年1月に、生徒に対し「DVDを見ての気づき」について自由記述式のアンケートを行った。以下、その抜粋である(表1)。

表1　生徒の気づき(抜粋)

·各种各样新奇的有创意的小部件。规矩好多啊!日式料理看起来很好吃的样子。除了规矩太多,表达方式有时候过于隐晦以外,还是个不错的地方嘛。就是这个样子
·觉得学生生活很轻松、快乐。他们的课余生活很丰富,可以参加各种社团活动
·日本街道人好少。学校离家好像很近,而且放学很早。学校对发型等要求较松!感觉便利店是万能的
·生活比较轻松,压力不如中国学生大。比较重视礼仪礼貌,长幼用语、敬语分得很清楚。许多生活习惯都不一样
·日本同学的午饭基本都是便当,我认为凉的饭不是十分好吃,但日本同学都习惯了。我看到日本同学都坐在地上吃午饭,好像是走廊,我最初的想法是难道他们不冷吗?我认为,日本与中国各个方面还是很像的

記述を見ると、生徒たちは「学校」「コンビニ」「塾」といった日常的な題材に興味の目を向け、「学生の髪型にはあまり厳しくなさそう」「町に人が少ない」等、教師が常識ととらえ見過ごしがちな事象からも多くの発見をしていることがわかった。また、「自分たちの生活と違う」「同じ個所もたくさんあることがわかった」のように、自身の生活と比較しながら考えている様子も見ることができた。このことから、『艾琳学日语』が若い年代の異文化理解能力育成に対し一定の効果を上げることがわかった。

4. 中等教育教師の異文化理解能力への意識

2013年4月に同教材を出版し、その後の普及や研修業務の展開を考えるにあたり、北京日本文化センターは現場における日本語教師の意識を把握するためにアンケート調査を実施した。時期は2013年5月～6月、対象は北京・天津・上海・西安・ハルビンの中等教育機関で日本語を教える中国人日本語教師32名である。内容は、①今までに日本語授業の中で扱った文化項目の内容及びその理由、②これからやってみたい文化内容、の二点で自由記述式、中国語可とした。

その結果を見ると、以下の特徴が見られた。まず、扱ったことがある、あるいは今後扱ってみたいとされた内容は、日本の風俗習慣(日本の祝日や伝統的な年中行事)や衣食住、伝統文化や伝承、マナーに関するものが中心であった。『艾琳学日语』が重視する日本の高校生の身近な日常生活といった回答は3点に留まった(表2)。

表2　今までに日本語授業の中で扱った文化内容　（　）内は回答数

風俗·習慣	衣食住	伝統文化·伝承	マナー·行動	歴史·風土等
年中行事(6)、祝日(5)、風俗·風俗習慣(4)、習慣(2)、民俗、冠婚葬祭、贈り物文化、成人式、盆踊り、正月の餅菓子、引っ越しと大晦日のソバ、花見	飲食文化(6)、飲食·食べ物·日本料理(4)、日本料理の食べ方、衣食、服装·服(3)、和服·浴衣(3)、服装文化、着物·浴衣の着方(2)、住宅(4)	伝統文化、茶道、茶道文化、書道、歌舞伎、相撲、昔話	社交礼儀·礼儀作法·マナー(3)、姿勢と礼儀、ビジネスマナー、ものを大切にする、接客態度	歴史(2)、地理(2)、旅行(2)、政治、経済、日本の近代史、季節、桜と季節、五月雨、梅雨

現代社会	芸能·現代文化	日常生活	文字·言語	背景
交通(3)、コンビニ(2)、ゴミの分別(2)、医学の発達	アニメ文化、アニメ(3)、音楽(2)、映画、流行文化	日常生活、日本の高校生の生活(2)	漢字の比較(2)、数字の比較(2)、授受表現	「いただきます」という語の裏の感謝の気持ち

また、文化を扱う理由は、「学生が日本の文化を理解するため」「生徒が興味がある」という回答が中心であった。これらは異文化理解能力の構成要素である「好奇心」「異文化への関心」に相当する。一方、「背景を＜考える＞力」を連想させる回答は一点のみに留まった。また「多様性」「柔軟性」に触れた記述は見られなかった(表3)。

表3　文化を扱う理由·期待する効果　（　）内は回答数

背景理解	·日本への理解が深くなるから(2) ·文化を印象深く覚えられるから ·相手国を認識したり、文化を理解したりすることが必要だから(2) ·背景にある原因と意義を考え、日本と日本文化への理解を深めることができるから
言語学習への効果	·生徒が日本語への理解が深くなるから ·単語を深く身につけることができるから ·背景知識を理解してからこそ、言語の楽しみと応用は一歩面白くなり、意義も大きくなるから ·分布理解のため(授受表現)
好奇心	·生徒が興味·意欲を持っているから(10) ·生徒が興味を持つから(3) ·生徒が積極的に授業を受けるから(2)
適応	·留学する生徒たちにできるだけ早く日本に適応させたいから
交流	·日本文化と日本人を理解し相手を尊重すれば、友好なコミュニケーションにつながるから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com